所報

No.146
令和7年6月12日

富山県総合教育センター　富山市高田525
E-mail：sogokyoiku@ed.pref.toyama.jp（代表）
URL：https：//www.center.tym.ed.jp

センターウェブサイトからカラー版の所報がご覧になれます。

巻頭言　指導観の転換－これからの教師に求められる「ファシリテーター」としての役割－

所　長　辻本　努

１人１台端末の導入により、授業の中で児童生徒が自己調整しながら個別に学習する機会が増えれば、教師の果たすべき役割も当然変わってきます。また探究的な学習の場面において、教師としてどのようにかかわっていけばよいのか悩んでおられる方もいらっしゃることでしょう。児童生徒の主体性の育成が求められているからといって、「全て子供に委ねればよい」というわけにはいきません。むしろ、個別最適な学びにおける児童生徒間の「格差」や学びの「浅さ」を生まないための、積極的かつ高度な教師の指導性が求められていると言えます。

キーワードは、「ファシリテーション」ではないかと思っています。「ファシリテーター」は会議の進行役といった意味で使われますが、特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会によれば、「人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りする人」と定義されています。教師は、授業の中で主導する場面もありますが、ファシリテーターとしての役割も求められているのではないでしょうか。授業の目標達成を念頭に置き、十分準備したうえで、児童生徒の思考や感情、児童生徒同士の関係性などに心を配りながら授業を「進行」していく、といったイメージです。

具体的には、学ぶ環境を整え、本時の目標を提示した後、学び方を児童生徒に委ねます。そして児童生徒が主体的に学習に取り組む姿を見守り、学びの成果をチェックしながら、「○○さん、こんなことを書いたんだね」「○○さん、とても具体的でいいですね」といった声掛けを行い、よい取組みを認めます。この声掛けが実は他の児童生徒の思考の手助けとなり、学びの深まりを促します。またクラウドなどを活用した「他者参照」も同様の効果があります。そして終末では、各自が学んだことを整理し、教師はそれをクラス全体で共有し、まとめます。

現代は多様性の時代と言われますが、教室にも多様な児童生徒が存在します。これまでのように一斉指導で対応することは困難です。児童生徒の多様性に対応するためには、我々教師がICT環境をフル活用し、ファシリテーション力を発揮した授業づくりを行う必要があります。そして、子供たちの主体的な学びの実現、ひいては「自律的な学習者」の育成を目指さなければなりません。

当センターでは、こうした教師主体から学習者主体への指導観・学習観の転換を意識し、今後も様々な教職員研修等を提供することにより、これからの教師に求められる資質能力の向上を目指してまいります。

令和７年度初任者研修会・新規採用教員研修会より

協議「教職員の服務」
初任研（高・特）４月３日

グループワーク「幼児教育」
新採研（幼・保）４月22日

「１人１台端末の活用について」
初任研（全校種）４月24日

研修顧問・学力向上アドバイザー・客員教授の紹介

今年度は研修顧問と学力向上アドバイザーそれぞれ１名と、富山大学教育学部から３名の客員教授が着任されました。

研修や調査研究事業等において助言をいただくことになっております。

◆坪池　　宏　研修顧問
◆中川　邦章　学力向上アドバイザー
◆和田　充紀　客員教授（代表、企画調整部、教育相談部）
◆増田　美奈　客員教授（教育研修部）
◆月僧　秀弥　客員教授（科学情報部）

調査研究事業の概要

教育研修部

学んだことを生活や学習に活用する力の育成に関する調査研究（2年次）

― 算数科の授業を通して ―

研究主題にある「活用する力の育成」に向けて、仮説を「子供の既有知識をつなげる学習活動を行うことは、数学的な見方・考え方を働かせ、概念的な理解を深めることに有効である」と設定し、「授業モデル」《図１》を用いて授業づくりを進めました。

授業実践からは２つの知見を得ることができました。１つ目は、「既有知識」を有機的に捉えた「知の構造図」《図２》を作成することにより、授業モデル全体が捉えやすくなるということです。２つ目は、複数の教員で「モデレーション」《図３》の手法を用いて授業づくりを行うことにより、多様な視点から子供の思考プロセスや表現の特徴を読み取り、有効な手立てを講じることができるということです。

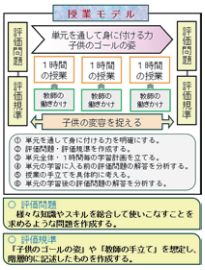


図１　授業モデル

以上の授業実践から、新たな学習課題に対し、既有知識を根拠に考え、説明する子供の姿が多く見られるようになりました。また、「何を理解できるようになればよいのか」という見通しをもって学習に取り組み、「自らの学び」を実感する姿が見られるようになりました。

２年次の研究の方向性は、「まとめ」の充実により「統合的・発展的に捉えること」、学びの「ふり返り」の充実により「数学的な見方・考え方のよさを見いだすこと」ができるか、検証を重ねていきたいと考えています。

図２

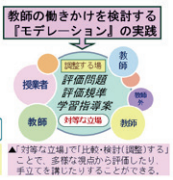


図３

科学情報部

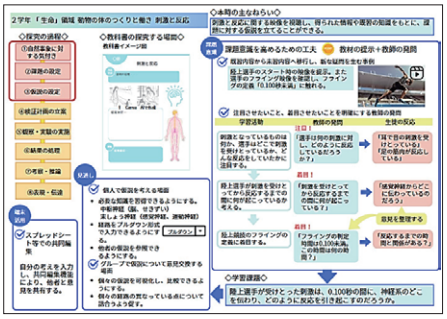
中学校理科における科学的に探究する学習に関する調査研究（2年次）

― 生徒が自ら探究する授業づくりを目指して ―

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）理科編では、探究の過程が一層重視され、富山県でも「令和７年度幼・小・中学校教育指導の重点」で、科学的に探究する過程全体を通して生徒が主体的に学習活動を行い、それぞれの過程において資質・能力が育成されるよう、指導の改善を図ることが求められています。

このような背景を踏まえ、本調査研究では「探究的な学習の充実に向けて、生徒が自ら科学的に探究する授業を実践するための教師の有効な手立て」を明らかにすることを目的に、昨年度より２年計画で研究を進めています。

昨年度は、教師の手立てとして、①生徒の課題意識を高めるための工夫、②生徒が見通しをもって課題解決に向かう工夫の２点を「授業デザインシート」（右図）にまとめ提案しました。



授業デザインシート

２年目となる今年度は、昨年度の成果を発展させ、①については、教師が効果的な発問を設定するための具体的な手順やポイントを提案し、②については、生徒が見通しをもって観察・実験に取り組めるよう、課題解決への道すじや方法を予測しながら、仮説を立て、検証計画を立てるための手立てを検証します。さらに、科学的に探究するための ICT の活用についても検証を進めていきます。

本調査研究で、先生方が日々の授業の中で、生徒が主体となり科学的に探究する授業を計画・実践する際の一助となることを目指していきます。

教育相談部

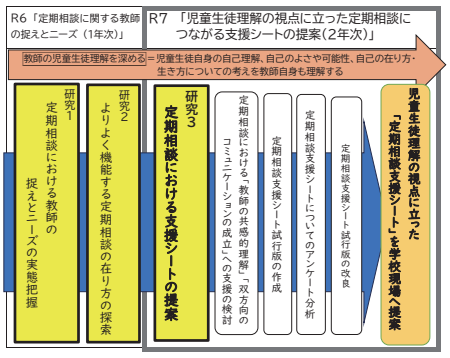
児童生徒理解を深める教育相談の在り方に関する調査研究（2年次）

― 児童生徒理解の視点に立った定期相談につながる支援シートの提案 ―

教育相談の目的は、児童生徒が将来において社会的な自己実現ができるように働きかけることです。学校では、多様な相談活動の一つとして「定期相談」が行われています。定期相談は、全児童生徒を対象に実施され、困り事や悩み事への対応だけでなく、安心感の形成や信頼関係の構築への作用も期待でき、大変重要な時間です。

本研究ではこの定期相談に着目し、１年次は、教師が定期相談をどう捉え、どのようなニーズをもっているかなどの現状を把握し、その効果や課題について整理しました。２年次はその成果を反映した、学校現場で活用できる「定期相談支援シート（仮称）」を提案することを目指します。

まずは、１年次の研究で得られた「教師の共感的理解」と「双方向のコミュニケーションの成立」を支援する視点から手立てを検討し、支援シートを作成していきます。



研修事業より

現場のニーズに合わせた研修を企画しています！　教育研修部

◆専門研修「外国人児童生徒教育実践講座」　全４回

外国人児童生徒教育の専門家を招き「外国人児童生徒等への対応」や「日本語指導の基礎」「日本語指導の現状と今後」について話を聴き、学校の体制づくりや初期指導、明日からの授業で使える実践的な方策について学ぶ講座を実施しています。

第１回（4/23）の講座では、初めて外国人児童生徒等の日本語指導を担当する教員を対象に、外国人児童生徒教育の概要や対話型アセスメント（DLA）の活用についての講義・演習を行いました。受講者からは「やさしい日本語を意識しながら外国人児童生徒や保護者と接したい」「DLA を活用し、個別のニーズに応じた指導計画を立てていきたい」等の感想がありました。近年ニーズが高まっている講座の一つであり、引き続き先生方を支援していきたいと思っています。

講義２
「外国人児童生徒への日本語教育の意義」

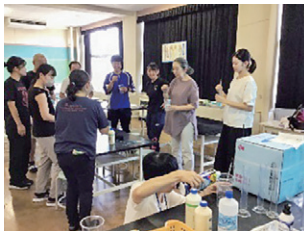
◆職務研修「校内研修活性化研修会」　全３回

この研修会は、授業分析の手法やワークショップ型授業研究の在り方について研修を行い、校内研修の推進を図ることを目的としています。今年度は、グループ・モデレーション（グループのメンバーが、教材観や児童生徒観をもちよって授業づくりを行う活動）を通して、指導力の向上を図る校内研修の進め方を学びます。第１回（5/7）の研修では、講義テーマを「教員の気付きが深まる研修のデザイン ～グループ・モデレーションの手法を通して～」とし、グループ・モデレーションを体験しました。第２回（5/14）で校内研修に向けての演習を行った後、第３回（10/22）で各校の実践報告を行います。

「校内研修活性化研修会」

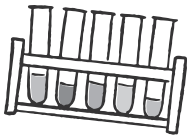
科学情報部では、今年度もさまざまな研修を実施します。研修の一例を紹介します。　科学情報部

理科実験・観察訪問研修



研　修
「しゃぼん玉遊びの活用」

研　修
「もののとけ方」



小学校および特別支援学校の教員を対象に理科の指導力の向上を図ることを目的に研修します。今年度より、当センターウェブサイトからフォームでの申し込みが可能となりました。教科書の内容と関連する実験はもとより、授業で使える楽しい教材やものづくり等、一緒に理科のおもしろさを体験できる研修にぜひご参加ください。

学校におけるICT活用研修会

探究×ICT活用コース

ICT の効果的な活用を通して、児童生徒の主体的な探究活動をデザインし支援する方法について研修します。

生成AI基礎コース・活用コース

基礎と活用の２コースを開設します。生成 AI を用いて、授業や校務における活用方法について研修します。

デジタル・シティズンシップ教育研修会

児童生徒がデジタル社会のよき担い手となるための、デジタル・シティズンシップ教育の具体的な進め方を研修します。

ワンストップで対応できる相談窓口新設&「特別支援教育 学びQ&A」改訂！　教育相談部

富山県こども総合サポートプラザ

4つの機関が連携して対応します！

富山県こども総合サポートプラザ 総合教育センター 相談窓口開設

いじめ、不登校、非行、ニート、ひきこもりなど、こどもや家庭が抱える悩みにワンストップで対応できる施設が富山駅前のＣｉＣ５階にできました。

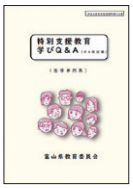
公共交通機関を使ってこども自身が来所することができます。また、土曜日、祝日の相談も受け付けています。

総合教育センター相談窓口では、これまでの電話相談や来所相談のノウハウを生かして、４つの機関で連携しながら、こどもや家庭をサポートしていきます。

〈４つの機関〉

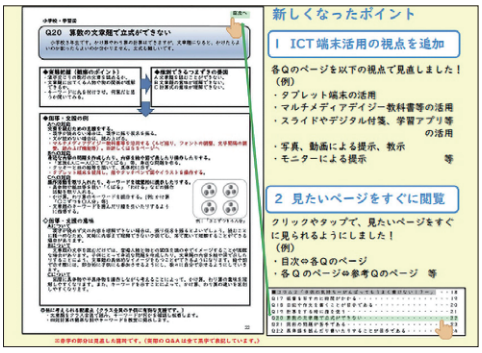
- **富山児童相談所 こども相談センター**：こどもや家庭全般に関すること
- **総合教育センター 教育相談窓口**：いじめや不登校に関すること
- **こども・若者総合相談センター**：不登校、ニート、ひきこもりに関すること
- **県警少年サポートセンター東部分室**：非行、不良行為、犯罪被害に関すること

「特別支援教育 学びQ&A」が使いやすくなりました！



新しくなったポイントとして、タブレット端末や学習アプリの活用等、ICT 端末を活用して支援する具体的な内容を各所に追加しました。また、電子版にしたことで、目次で見たいページを探し、そこをクリックすると、すぐにそのページを閲覧することができます。その他にも、学習面で活用できるマルチメディアデイジー教科書等の音声教材についての情報も掲載しています。

この「特別支援教育 学び Q&A」には、子供の姿に合わせた具体的な支援の例が載っているので、支援を考える際のヒントになります。



ダウンロードはこちらから
https://www.center.tym.ed.jp/toyamatokusi/16288

第42回富山県高等学校生徒海外派遣事業 帰国報告

企画調整部企画課　研究主事　山本　清則

令和７年３月10日（月）から21日（金）までの12日間の日程でベトナム、シンガポール、マレーシアを訪問しました。今回の研修テーマは、「ベトナム、シンガポール、マレーシアと富山県の持続的な発展―未来を切り拓くグローバル・リーダーの育成―」。県内の高校生から団員を公募し、20名が参加しました。

在マレーシア日本国大使館や在シンガポール日本国大使館への表敬訪問、ベトナム富山県人会との意見交換会では、海外への企業進出時代の話を聞き、将来を考える機会となりました。

企業訪問では、現地進出している日本企業の立山オートマシンマレーシアの電子部品や精密機械の製造販売する工場を見学し、イスラム教徒社員に対する多文化共生への配慮を学びました。クレアシンガポール事務所も訪問し、日本の魅力を海外に発信する活動や海外活動の支援について話を聞きました。

シンガポール市内見学

レホンファン高校での交流会

ホストファミリーとの交流会

ベトナムではレホンファン高校、マレーシアではラワン高校を訪問し、伝統的な音楽や踊りの歓迎を受けたお返しに、「ふるさと富山紹介」として英語でクイズを出したり、ダンスや三三七拍子を披露したりして、学生たちとの交流を楽しみました。農園が広がる田舎の村（＝カンポン）でのマレーシア流ホームステイ「カンポンステイ」を２泊３日で体験し、ホストファミリーとの思い出をたくさん作りました。

４月15日に県庁で行われた帰国報告会では、個人研究テーマについての発表を行いました。インバウンド需要の対策、武道・格闘技の比較、不登校問題の解決法、女性の社会進出の支援案、祭りの担い手づくり等、富山に関わるテーマ設定、研究をもとに現地調査結果をふまえての考察や提案を発表しました。

第42回高等学校生徒海外派遣事業の活動風景は、センターウェブサイトやInstagramに掲載しています。是非、ご覧ください。

ウェブサイト　Instagram

特別寄稿

チューリップの花言葉は「思いやり」

客員教授　和田　充紀

春に、可愛くそして美しい花を咲かせるチューリップ。
子どもから大人まで誰もがよく知っている花です。

♪ さいた さいた ♪ チューリップの花が ♪

この童謡は、誰もが一度は聞いたり口ずさんだりしたことがあることと思います。
新入児を迎える幼稚園や学校では、黒板に赤色や白色や黄色のチョークでチューリップを描き、または折り紙や色画用紙で作ったチューリップで廊下を飾るなど、心のこもったあたたかい掲示をよく目にしたものです。春の笑顔にはチューリップの花が大変似合います。

♪ ならんだ ならんだ ♪ ♪ あか しろ きいろ ♪

かつては、「赤・白・黄」が主であったチューリップかもしれません。今では、ピンクやオレンジ、緑や紫色など多彩です。近所の庭や公園花壇などで見かけるだけでも、実に様々な色があり、花びらの形状も多様です。世界中で広く愛され、品種改良が進み、現在は5000種以上の品種があるそうです。

色や形のバリエーションが豊富なチューリップは、見る人を楽しませて笑顔にしてくれる、ホッとする気持ちや明るい気持ちにしてくれる、そんな魅力のある花だと思います。

♪ どの花みても きれいだな ♪

このチューリップの歌の作詞者「近藤宮子」さんは、「なにごとにも良いところはある。とくに弱いものには目をくばりたい」という思いを歌詞に込めたそうです。
どの花も、そのままできれいだよ。
この花も、その花も、あの花も、みんなそれぞれが素晴らしい。
みんな違って、そのままでいい。
だからこそ、「笑顔になる」「ホッとする」「安心できる」・・・そのような大切な思いが込められている歌であり、花なのだと改めて気付かされます。
チューリップの花言葉は、「思いやり」だそうです。花そのものの美しさに加えて、チューリップの花言葉や歌詞から、私たちは学ぶことや教えられることがたくさんあるのだなあと実感しつつ、色とりどりのチューリップに癒されるこの春です。

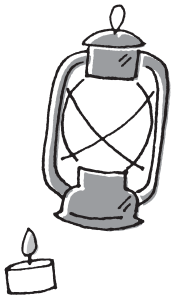
随想

未来への灯

科学情報部長　東海　直樹

５月初旬、私は新緑が眩しい呉羽青少年自然の家へと向かった。ボーイスカウト指導者の研修スタッフとして、３泊４日の濃密な時間を過ごすためだ。新潟、長野、富山、福井から集った21名の参加者を、12名のスタッフでサポートする。この研修は、ボーイスカウトの指導者、つまり子どもたちの活動を導くリーダーを育成するための「基本訓練」である。
豊かな自然の中でのキャンプ生活を共にしながら、参加者は昼夜を問わず講義に臨む。ボーイスカウト特有の異年齢グループ活動を実体験する中で、班ごとに協力して課題に取り組む姿は頼もしい。講義は、教育学的な視点、ボーイスカウト教育の本質、野外活動プログラムの立案と実践、そして最も重要な安全管理や危機対応に至るまで、指導者に不可欠な知識と技術を網羅する。
その日課は実に濃密だ。早朝の食材配給に始まり、炊事、点検、朝礼、午前と午後の講義、そして夜の課業とミーティング。すべてを終えるのは午後10時を回る。スタッフはその後、深夜まで反省会と翌日の準備に追われるが、その表情には使命感と充実感が漂う。
ボーイスカウト指導者は無給のボランティアである。スタッフも参加者も、自らの時間と費用を投じて集う。そこには純粋な精神が息づいている。ボーイスカウトの世界は、「研修歴」が信頼の証となる。基礎訓練の後も上級訓練、さらには指導者を養成するトレーナー研修と段階があり、それらを修了した熱意ある指導者たちがスタッフを構成する。だからこそ生まれる阿吽の呼吸と、前向きな参加者の真摯な眼差しが、研修の質を高めていく。
今回の研修では、９名の大学生が参加したことが心に残る。少子化の現代において、彼らの意欲的な姿は、活動の未来に一条の光を灯すかのようだった。
厳しいながらも互いに高め合った４日間。参加者がそれぞれの地域で、この経験を糧に子どもたちの育成に力を注いでくれることを願ってやまない。清々しい達成感と確かな希望を胸に、私は日常へと戻った。

キャンプサイト



科学の散歩道

「ユリノキ」

科学情報部　研究主事　二塚　裕子

総合教育センターの駐車場には、ユリノキ（学名：Liriodendron tulipifera）が植えられています。モクレン科の落葉高木で、成長がはやく大きな葉がつくる木陰が好まれ、校庭や街路樹としても親しまれている樹木です。普段、街路樹をじっくり観察する機会は少ないかもしれませんが、少し足を止めて見てみると、その樹木ならではの特徴や面白さに気付くことがあります。

【春の芽吹きとユニークな形の葉】

４月、ユリノキは瑞々しい新緑の季節を迎えます。小さな葉が日に日に大きくなり、あっという間に大人の手のひらサイズに成長し、初夏に向けて木全体が美しい緑の葉で生い茂る様子には、生命力を感じます。葉の特徴は、ユニークな形です。葉の先端が切ったようにくぼんでいて、まるでＴシャツか日本の半纏（はんてん）のようです。この形から「ハンテンボク」という愛称もあります。葉の葉脈はどのようになっているでしょうか？じっくり観察してみると面白い発見があります。

【初夏に咲く、見上げる花】

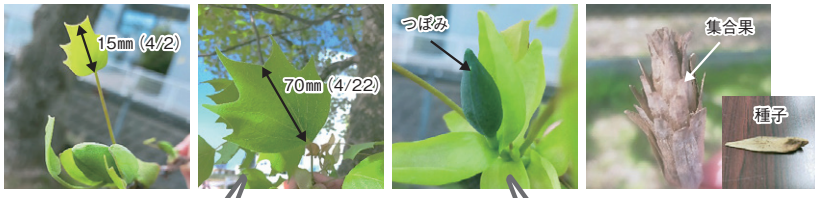
新葉が鮮やかな頃、葉の間に緑色の花のつぼみが隠れているのを見つけることができます。ユリノキのもう一つの見どころは、初夏に咲く花です。花はチューリップに似た形で、花弁は黄色で、オレンジ色の模様が入っています。ユリノキは、英名で「チューリップツリー」と呼ばれています。ただし、この美しい花は、たくさんの葉が生い茂る高い位置で、上向きに咲くため、地上からは意外と気付かれにくいものです。ぜひ開花の時期には、ユリノキを見上げて、美しい花を探してみてください。

【冬に残る果実と旅する種】

秋から冬にかけて落葉した後、松かさに似た形の果実（集合果）が木に残ります。これはたくさんの種子が集まったものです。個々の種子には翼（よく）と呼ばれるプロペラのような部分が付いており、風が吹くと回転しながら遠くまで運ばれていきます。この仕組みから、植物が子孫を残すための工夫を感じ取ることができます。

普段何気なく通り過ぎてしまうかもしれませんが、ユリノキは季節ごとに異なる表情を見せてくれる魅力的な樹木です。ぜひ、その変化に注目し、観察を楽しんでみてください。

※新葉や開花の時期等は、生息環境や個体差により異なります。（センターのユリノキは、５月中旬開花しました。）



20日間で4倍以上の大きさ！

開花した花をぜひ観察ください

ほっと一息
教育相談コラム

別れの向こうの、あたたかい光

教育相談部　客員研究主事　濵野　恵美

２年前の桜の季節、10年間乗った小さな車を手放した。その車は、新生児の長男と２歳の長女を乗せて走り出し、沖縄から徳島、そして富山へと私の家族の歴史そのものだった。サトウキビ畑から雪道まで、いつも一緒だった。それなのに、突然別れはやってきて、ぽっかりと本当にぽっかりと心に穴が開いてしまった。

それからしばらく路上で同じ車を見かけると、「あの車じゃないか」と目で追ってしまって、今ごろどこに居るのか、乱暴な運転はされていないかと胸がぎゅっと締め付けられる思いがした。なぜ、こんなにも寂しいのだろうか。

あの車にはかけがえのない時間が詰まっていたのだろう。後ろの席から聞こえた泣き声、かえるの歌の大合唱、しりとり、笑い声、そして転居先での心細さ。車を手放したことで、それらの思い出まで遠のいてしまったと感じたのかもしれない。

この喪失感は、空の巣症候群といわれるものに似ている気がする。子供が巣立つことは喜ばしい、でも、親の心にはぽっかりと穴が開く。物理的な距離ができるだけでなく、かつての賑やかだった日常が静かに過去へと遠ざかっていく。思い出の詰まったものがなくなるとき、私たちはただ「物」を失うのではなく、それとともにあった時間や気持ちをも手放すような気がする。

そんなある日、子供が「ママの車だよ」と言って、車の刺繍をした靴下をプレゼントしてくれた。驚きとともに、嬉しくて涙が出た。胸がほんわかした。

大切なものは、手放しても消えない。子供たちが成長し、たとえ巣立っていったとしても、共に過ごしたことはずっと心にある。車を見送るときに感じた寂しさは、この先子供が独り立ちするときの準備だったのかもしれない。いつか子供たちも、それぞれの道を走り出す日がくる。そのとき私は、子供たちの背中にそっとエールを送れるだろうか。と同時に、かつて私の背中を見送ってくれた人たちがいた事と、その人たちの気持ちをやっと今になって思う。

そう考えると、寂しさがあたたかさに変わった気がした。